

我々が護り、継承すべき文化とは…

津波で陸前高田市の松原が一本の松を残して流された。

倒れ流された松で作った薪を「京都五山送り火」で燃やす計画が、放射能汚染を心配する声で使用中止を一旦決めたが、批判が殺到したために薪約500本を陸前高田市から再調達し送り火で使用ことを決めたとの報道があった。

初期の中止の報道に接した時、「えっ？本当？」と思った。

被災した方々の想いが書かれた護摩木用の薪は検査では放射能汚染の心配はなかったのに、放射能汚染を不安視する方がいるので…と使用中止するのは、「京都五山送り火」は単なる観光行事に過ぎないということかなと思った。

仏教の真髓を一言で言えば、「慈悲（他の生命に対して自他怨親のない平等な気持ちを持つこと。楽しみを与え、苦しみを取り除くこと。）の心」と思っていた。

また、先の大戦で古都の京都、奈良は空襲に遭わなかったが、それとて連合国側に古都の人類遺産ともいべき文化遺産、文化財を守るためとの意図があったとも聞き及んでいる。

世間から批判を受けての再決定は、とりあえずけじめをつけたようにしか思えないし、被災地に対して失礼と思うし、最初から慈悲の心を実践すべきでなかったか。

更に、福島原発事故の風評被害で外国からの観光客は激少している。

京都と言えば外国からの観光客が必ず訪れる程の観光地であり、外国に対して「放射能汚染の心配はありません！」と観光客誘致を呼びかけることができるのだろうか。

大震災後、日本国中で「絆」という言葉で象徴されるように支え合おうとしているのに、保存会の方々は、いったいどんな文化を護り、どう文化を継承しようとしているのだろうかと思った。

こうあれこれ気になっていたのも、再調達には若干ホッとした。

追伸：

8月13日の報道では、再調達した薪の内部からは検出されなかったが、表皮だけを削り取って集めた試料から放射能汚染が分かり、「京都五山送り火」に使用することは再中止になったとか。

専門家によると、薪を燃やしたとしても二次汚染の心配のない値とか。

原発事故後西日本でも微量のセシウムが観察されているというのに、こうした事象の経過は、結論はどうあれ被災地の風評被害に繋がりがねず、京都市長が謝罪に行くとの申し出を陸前高田市長が断ったのは、さもありませんかと思う。